

佳作

広島原爆

東京都 東海大学菅生高等学校一年 中村慎

今年の夏に母の実家である広島に行った。実家は爆心地から三十キロの所にある。祖父が六才の時に原爆が落とされ、キノコ雲がはつきりと見え幼い心に強い衝撃をうけ、とても恐ろしかったそうだ。その日の夕方には助けを求めて被爆者が親戚の家に向かう姿がぞろぞろと見えたと話していた。当時の鉄道に勤務していた曾祖父は線路の修理に向かったその当時は、まだ放射能が残っているのを知らなかったので足の皮膚がたれたような状態になった。被爆者として原爆手帳を持っており、死ぬまで後遺症に苦しめられた。何度か話は聞いていたが原爆についてはあまり知らなかった。そこで原爆資料館に実際に赴いた。

原爆資料館では焦げたお弁当、グニヤリと曲がったガラスビン、黒い雨の跡、など衝撃的な資料が展示されていた。

戦後七十年間でアメリカの大統領の広島訪問が実現されなかった。

今もアメリカでは、「原爆投下は、その後の日本本土上陸戦で失われる多くのアメリカ兵の命を救った」という論が大勢だ。つまり、アメリカ社会では原爆投下の「謝罪」などは許されない。唯一の原爆使用国アメリカでは現職の大統領の被爆地訪問は大きなタブーだった。どんな形であれ、広島を訪問することは「謝罪」と受け取られかねないため、それは「実現するはずのない出来事」だったのである。だが広島市民は「心から大統領の訪問をまっています。謝罪だけでなく、広島地から、核廃絶への祈りを発信して欲しいのです。米兵を含む全犠牲者への追悼を」。

この手紙による事実を知ったオバマ大統領は、広島訪問をはつきりと意識し始め「私は自分の意思で広島に行く」と言ったのである。

二〇一六年五月、オバマ大統領は広島を訪問し、十七分のスピーチをした。オバマ大統領は、まっすぐ坪井直さん、森重昭さんという二人の被爆者に歩み寄り、言葉を交した。感極まった森さんを抱いたオバマ氏が森さんの背中を撫でた時、僕はしばらく声を出すことが出来なかった。感動で言葉を失った。

オバマ大統領が広島に来た事で「心の整理」がいった人もいるだろう。傷が癒されたという人がいるだろうと思うと、僕は自然と目に涙がたまっていった。

この訪問でアメリカ大統領の核廃絶の思いをこの爆心

地広島から発してもらおうという長い間の悲願が達成された事は、広島の人々の努力と、人間として最も大切な許しの心があったのではないかと思った。

これからも日本人として生まれた僕は本当に原子爆弾を落とす必要があったのか？という問いは続けていきたいと思う。

過去七十年間、スウェーデン、西ドイツ、日本などは核保有国になろうと思えばなれたかもしれない国々である。それぞれ事情は違うが、潜在的に技術はあっても、それを使わないと意思決定したのである。日本は、〈非核三原則〉という建て前を打ち立てた。なかでも核を保有しないと決めたのである。

僕は核という大きな問題について常に関心を持ちつづけた。そして、今後世界全ての国々が核を持たない、持たせない、そんな世の中になってくれることを望む。